

# 国際結婚家庭の日本語をめぐる選択と実践

## -英国在住の親子のケース・スタディ-

三宅和子(東洋大学)

miyake@toyo.jp

### 【要約】

日系ディアスポラのことばとアイデンティティを探る研究の一環として、英国在住の子育て世代の国際結婚女性にインタビュー調査を実施した。本論文ではインタビューの中から、子どもの日本語と補習校をめぐる語りに着目する。幼少時から学齢期にかけてどのような選択と実践が行われているのかをさぐり、特に後半では子どもを補習校の高等部まで通わせ続けた CB に注目し、海外で日本語を継承・保持させることの困難点や問題点を考える<sup>1</sup>。

### 1. はじめに

近年、流動化する世界情勢の中で、ハワイ、南北アメリカなどの旧来の「移民」という枠組みではとらえられない新しいタイプの「移動する人々」の存在が認識されるようになってきた。筆者は、これら海外に長期間在住あるいは永住する日本語話者を、「日系ディアスポラ」と名づけ、そのことばとアイデンティティの関係を研究している。これまで、高度経済成長期前後に国際結婚をして英国に移り住んだ高齢の日本人女性たちの言語生活をインタビュー調査してきた(三宅 2014a, 2014b, 三宅他 2015, Miyake 2015)。しかし、ひとつの世代だけを見ていては分かりにくい社会的な影響を捉えるため、比較の対象として子育て世代の日本人女性たちも調査するようになった。

子育て世代の国際結婚家庭では、子どもの日本語をどう扱うかが大きな関心事になっている。本研究では、母親たちが子どもの日本語の継承・保持にどのような願いをもち、どのように取り組んでいるかを、補習授業校<sup>2</sup>(以下「補習校」と略す)とのかかわりを中心に考察する。

### 2. 研究の背景

これまで調査を行った高齢の日本人女性たちが渡英した 1960~70 年代は、英国在住の日本人人口そのものが非常に少なく、日本という国の知名度の低さ、政治・経済の影響力の弱さを反映して、日本語ということばの価値も低かった。この世代は、日本国政府が 1985 年に父系血統主義から政策を転換するまで、母親の日本国籍を子どもに継承することができなかったため、子どもはみな英国籍であった。まわりに日本人が少なく、日本語を教える環境に乏しく、情報も少なかったため、子どもに日本語が継承されていない(三宅 2014a, 2014b)。このような社会状況が変化し始めたのは 1980 年代に入ってからである。英国の在留邦人の数は 1980 年代から急増し始める。その後 1990 年代はバブル崩

<sup>1</sup>本研究は JSPS 科研費 15K12898 の助成を受けたものである。

<sup>2</sup>ロンドン補習授業校の学則によれば、「英国の学校や国際学校に在籍している英国在住の学校教育年齢に相当する日本人子女等を対象に、帰国後の学校生活に適應できるよう学習指導要領に準じて国語教育を行うことを基本とする。」と定められている。

壊のあおりを受けて低迷するものの、2000年代の中頃から増加に転じている（図1）。ただし、1980年代に多かった企業の駐在員や報道関係者などの数は伸び悩み、永住者の数が増え続けている（外務省領事局政策課2014）。

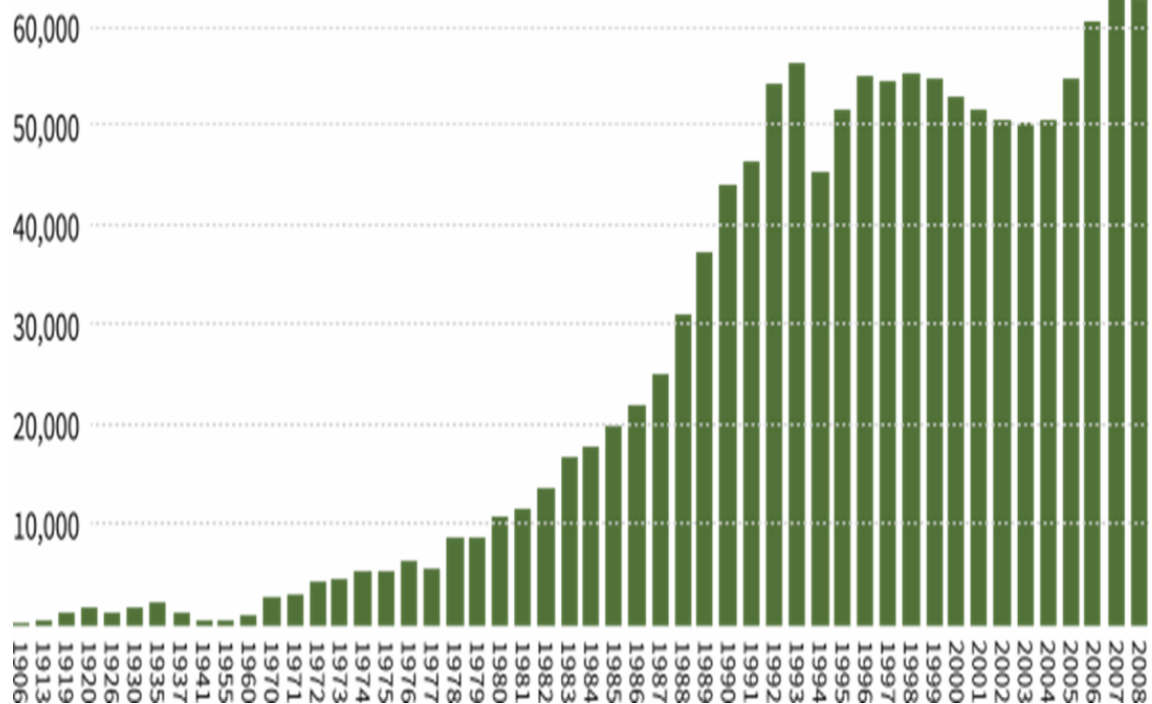


図1. 英国の在留邦人数の増加

表1は在留邦人（学齢期）子弟（長期滞在・永住者）が日本語学校、補習校、その他の日本関係の教育機関に通っている数を示している。日本人学校より補習校とその他の機関に通う子どものほうが圧倒的に多いが、その多くが国際結婚家庭か永住家庭の子どもである。国際結婚家庭の子弟の場合、現地校に通い、土曜日のみ開かれる補習校にも通うという選択が多くなされ、日本人学校に通うケースは稀である。

現代の子育て世代を取り囲む状況は、高齢世代の子育て時代とは大きく異なる。世界における日本のプレゼンスは高まり、日本文化への評価も高い。海外にいても日本の物資・情報は容易に手に入り、日本国内の友人・家族との交流も継続できる。このような環境においては、子どもに日本文化や日本語を継承・保持させるのは当然であり、親にはその責任があると考えられがちである。とはいえ、家庭以外で日本語を使う機会がほとんどない環境で、日本語を学び保持していくことは容易なことではない。本研究では10名の協力者の語りから、その困難点や問題点をあぶりだしていく。

表 1. 在留邦人(学齢期)子女数(長期滞在者)

管轄公館	小学部				中学部				小・中学部
	日本人学校	補習校	その他	合計	日本人学校	補習校	その他	合計	総計
英国大使館	281	<b>937</b>	703	1,921	114	<b>195</b>	218	527	2,448
エディンバラ総領事館	0	42	37	79	0	22	14	36	115

(平成 26 年 4 月 15 日現在 外務省領事局政策課調べ)

### 3. 調査概要

本研究は、表 2 の国際結婚家庭の子どもをもつ主婦を調査対象にロンドンとその近郊で行ったインタビュー調査を基にしている。協力者のうち 2 人は幼少期の子どもをもつが、それ以外は学齢期の子どもをもち、ほとんどが補習校の小学部か中学部に通っている。

- ・調査時期：2013 年 8～9 月
- ・調査協力者：1990 年～2000 年代に国際結婚して在英の 30～40 歳代の日本人女性 10 名
- ・調査場所：ロンドンおよび近郊
- ・調査方法：各 2 時間前後の半構造化インタビュー

表 2. 調査協力者プロフィール(2013 年 9 月現在)

	名前年齢	離日	子ども	現職	過去に経験した職業
1	SR35 歳	2004	女 1 歳	主婦	介護職員・日系商店・通信系企業経理(英国)など
2	EJ42 歳	1997	男 15 歳 女 12 歳	主婦	銀行(日本) 銀行・友人のサロンの手伝い(英国)
3	MS46 歳	1990	男 12 歳 女 7 歳	主婦	貿易会社経理部・幼児英会話教室講師(日本)、銀行秘書・会計事務所 PA(英国)など
4	SB49 歳	2006	男 8 歳	主婦	デザイン業界(広告など)・秘書業務(日本)
5	CB49 歳	1998	女 15 歳 女 11 歳	在宅 翻訳	輸入小売店販売促進・英会話学校講師・輸入商社営業(日本)、通訳・翻訳学校講師(英国)
6	MT45 歳	1990	男 13 歳 男 10 歳	主婦	銀行(日本) 家電メーカー・銀行(英国)
7	SH44 歳	1993	女 8 歳 男 5 歳	主婦	出版社営業(日本)、フリーランス翻訳&通訳(スペイン)、日系企業(英国)など

8	YK44 歳	1990	女 10 歳 男 6 歳	主婦 日本語教師	生命保険証券部・旅行会社(日本) 日系旅行会社・旅行オペレーション会社(英国)
9	HI45 歳	2000	女 4 歳 男 1 歳	留学代理業 主	航空会社カウンター・仏系ツアーオペレータ・ PC ソフト会社(日本)、語学学校手配業(英国)
10	KA48 歳	2000	女 11 歳 男 7 歳	主婦	外資系製菓会社(日本) 日系銀行(英国)

以下、10名の協力者の語りを提示しつつ、後半部ではCBに注目しながら考察を進める。CBに焦点を当てるのにはいくつかの理由がある。まず、インタビューした家庭の中で長女の年齢が15歳と最も高く、補習校高等部まで進学していることが一つの理由である。母親たちの語りからは、小学部の高学年ですでに困難を感じ始め、中等部まで行くのは無理だという判断をせざるを得ない家庭が多い。高等部まで進む能力と意欲を持続させるために、どのような実践をしてきたのかを知りたい。CBとその家族の概要を以下に示す。

CB：49歳。在宅翻訳業。結婚前には輸入小売店・英会話学校講師・商社営業・通訳翻訳学校講師などを幅広く経験。アメリカ、イギリスの留学経験もある。日本語能力を100とすると英語能力80。京都出身。

PB：夫。45歳。ITエンジニア。日本で英会話講師をしていた時CBと出会う。日本語は居酒屋で注文ができる程度。簡単な漢字やひらがなは読める。

MB：娘。15歳。英語能力を100とすると日本語能力60。Secondary school 11

AB：娘。11歳。英語能力を100とすると日本語能力40。Secondary school 7

\*言語能力評価はすべてCBの自己申告

#### 4. 幼少期の子どもの日本語

10人の協力者は、子どもの幼少期には母親ネットワークをつくったり集まりに参加したりして、定期的にはほかの母親と顔を合わせるようにしている。「なかよレクラブ」、「サクラ文庫」のような集まりを定期的に関き、母親間で協力して日本語の読み聞かせや遊び、季節の催しなどを行い、日本文化に触れる努力をしている。学齢期になると、ほとんどの家庭は子どもを補習校に入れている。行かせなかった2人（MSとMT）も、学齢期になるまでは、週に1度集まって子どもを遊ばせたり、交替で日本語を教えたりしていた。しかし、Primary schoolに入ってから集まるのをやめてからは、MSとMTの子どもたちの日本語環境は大きく変化していった。

MSは補習校に行かせなかった理由として、「まずは英人としてきちんと育ててほしい」と思ったと述べている。そして、補習校に行かせている家庭の様子を見聞きし、土曜日が毎週つづれ宿題も多く、現地校との両立が難しい様子から、そこまでして行かせるだけのこだわりがなかったと振り返っている。将来的に日本で生活する予定がないことも判断に影響を与えたと考えている<sup>3</sup>。

<sup>3</sup>引用中IRはインタビューを指す。インタビューイは表2の仮称で示してある。なお、引用する語りは、読みやすさを優先して、繰り返しや言いよどみなどを一部省略し整えたものである。

IR: で、お子さんは、もう、英語が百パーセント。

MS: そうですね英人ですね、ことばの中では。まあ日本人の知識とかはありますけど。

IR: それってやっぱり、こっちに永住するかどうかという意識と関係ありますか？

MS: もちろんそうだと思いますね。やっぱり(補習校に)行かれてる方は GCSE<sup>4</sup>で日本語をとるとか、あとまあ旦那さんが日本語できたりとか日本の大学に入りたいとかありますからね、そういうので入れてる方もいるし...

一方 MT は、土曜日に子どもの送り迎えが難しい状況であったために補習校をあきらめた。Primary school に行き始めて、他の日本人家庭の子どもたちと集まる機会がなくなると、日本語を話す友人がいなくなり、子どもも日本語で話す意味を感じなくなっていったという。MT は自分がいくら日本語で話しかけても英語で返ってくることや、自分自身が子どもの勉強を見てあげる過程で、英語をわざわざ日本語に直して説明する矛盾を克服できずに、徐々に英語が増えていったことを、残念そうに述懐している。

MT: そう、補習校行かない、あのけっこう行ってる子いるんですけど、うちはちょっと土曜日、難しくって行かせなかったんで、やっぱり友達がいらないですね。

IR: 日本人の？

MT: その日本人の学校と一緒に行く友達。だからもう、英語の友達ばかり (になってしまっ) で、どうして日本語喋らなきゃいけないの、っていう感じ。

MT: そう、学校の英語の算数の問題でも、あの、日本語でいうと「何？わかんない、わかんない」って。どんどんこう...だから私も、英語でいうと、もうもうだいたい全部英語になっちゃって {笑いながら} 下手な英語で。それでもう、子供とも英語ばかりになっちゃいましたね。すごい残念なんですけど。

このように、幼児期から日本語や日本文化を身近に感じる環境を作り出してきた親も、Primary school 入学段階でひとつの節目を迎える。補習校に行かせないという決断は個別的なものであるが、日本語へのこだわりの強弱のほかに、家庭生活とのコンフリクトの有無、現地校の授業の優先度合、日本に今後住む可能性の有無や、子どもの日本語使用の必要性などが関わっているといえよう。

## 5. 補習校に通わせるかを決める節目

ところで、子供の日本語学習をどうするかを決断する節目の時期は他にもある。図 2 はイギリスと日本の教育システムを比較し、各段階の該当年齢を示したものである。教育システムにずれがあるため、例えば「Primary school が終わるまで補習校に通わせる」という選択と、「小学校 6 年までは補習校に通わせる」という選択には 1 年のずれがある。それだけ様々な段階で決断を迫られるわけであ

---

<sup>4</sup>イギリスとウェールズ、北アイルランドでは、義務教育 (5 歳～16 歳) を修了するときに GCSE (General Certificate of Secondary Education) を受験する。日本語も GCSE で受験できる科目のひとつとなっている。

るが、現地校での教育が主になっている国際結婚家庭では、イギリスの教育制度で4つに分かれているKey Stageを上がっていくときにそれが顕著となる。すなわち、5歳のPrimary school入学からのKey Stage 1、Primary school Juniorといわれる7歳から11歳までのKey Stage2、11歳から16歳までのSecondary school（ここまでが義務教育）のKey Stage3、6<sup>th</sup> formといわれる16-18歳の高等学校(大学入学希望者には必要)のKey Stage4である。Key Stage 3の終わりにGCSEの試験が行われるが、希望者は早めに受験することも可能である。

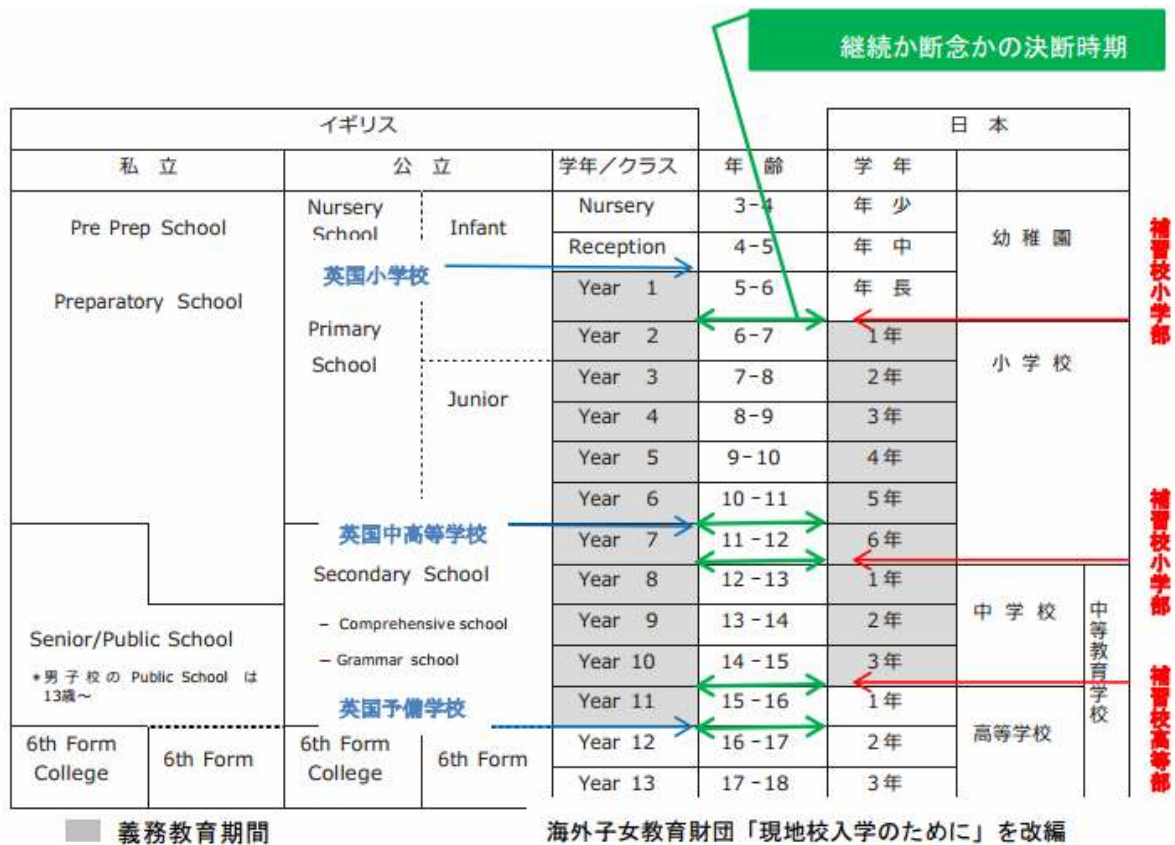


図2. 英国と日本の教育システムと日本語学習の決断時期

## 6. 補習校の勉強について

### 6-1. 子どもの抵抗：補習校をいつまで続けるか

4でも見たように、最初の大きな節目はPrimary schoolに入学した後から小学校入学時にかけて訪れる。

補習校の授業は、日本の学習指導要領に則った、日本と同様の教科書を使用した国語科の授業である。土曜日午前中のわずかな時間では、その内容を十分に理解・吸収することは難しい。家庭以外の日常生活で日本語を使うことも少ない。そのような中、地域の友人と遊んだりサッカーなどのスポーツをしたりする機会、友人の誕生日などのイベントが多くなっていく。このような土曜日に開かれがちなイベントに毎週参加できないことや、高学年になると増える現地校での勉強の量に加え、補習校での宿題の多さなどから、子どもに負担感が募る。補習校の勉強内容も次第に難しくなってくると、通うことに対して消極的になったり嫌がったりするケースが増えてくる。親としては出来るだけ長く続けさせたいという思いがある一方で、小学校を終えるまでは頑張ることが最終目標になっていく場

合も少なくない。また早めの反抗期が始まって母親のことを聞かなかったり関係が悪くなったりするケースもある。

*YK:* 誕生日会とかね、色んな楽しいイベントが入ってくるにもかかわらず、それには行かないで補習校に向かわなければならない。

*IR:* じゃあお子さんは補習校に通ってて、大変だけどついていってるっていう感じなんですかね。

*KA:* {笑いながら} (勉強に) ついていってるというよりは、なんかぶら下がってるみたいな...

*SH:* うちも小学校6年ぐらいまでは続けてほしいですけどセカンダリー、中学、ぐらいになったらもういいかなーとか思ってんですけど。

*EJ:* ある時期から喧嘩が多くなって、もうそこまでしてやる必要はないということで、まあ一応小学校6年までは補習校に通わせたんですけど...

*YK:* そうですねー。だから中3まで。でもここの補習校の中3出ても、日本の中3のレベルじゃないので、やっぱり週1回だけで...

## 6-2. 夫や家庭の態度

夫や夫の家族が日本語の教育にどれほど協力的であるかも影響がある。インタビューした10家族は程度の差こそあれ、日本文化や日本語を大切にすることに理解があったり、積極的に応援したりしていた。夫に日本での就労経験があったり、食事や文化に強い興味をもっていたり趣味にしていたりすると、日本語学習にも積極的に関与する傾向がある。また、夫の家族が子どもの母親のことばや文化を継承することに意義を認めていると、家庭内でもやりやすいという。将来的には日本に住みたい、子どもを留学させたいと考えている親はなおさらである。イギリスに永住する予定であっても、日本語はしっかり学ばせたい家族もいれば、当初積極的であった夫が、嫌がる子どもと母親の戦いを見かねて反対を始める場合もある。

(日本に帰国の予定があるから熱心に日本語を勉強させるのかとの質問に対して)

*SB:* 帰りたいけど、旦那さんの仕事が日本では探せないだろうってなると...

*IR:* 無理そうって？

*SB:* こっちにいざるを得ないみたいな。それでも、そのメンバーはみな補習校に行つて。1人の子はウィンブルドンにあるジョバつていう塾なんですけど、そこに行つたりして。みなよくできるんですよ。だから、将来の可能性と、あと親がどれだけ、永住組でも親によってまたちょっと違う部分はあるのかなつて。

(子供が日本語を習うことを夫が嫌う家庭もあることに関して)

*EJ:* うちそれはなかったですねえ。もう、とてもいいことだと。(しかし補習校に通わせ続けることに反対し始めたのは)日本語を学ぶことが大変とかじゃなくて、うちの旦那はもう、そこまでして、

喧嘩しながらやる必要はないんじゃないかといつもいってたんです。

CB: 途中で逆に「何でそこまでせな、やらなあかんの」って、私たち。やっぱり（私が）子どもと喧嘩しましたので。っていうので、すごく夫婦の仲がまずくなったりしたこともありますけど。

## 7. 補習校へ行かせる矛盾と問題点

Primary school の壁を乗り越えて Secondary school へ進んだ後にやってくる次の節目が GCSE、16 歳までに受ける公的資格試験である。実際には早めに受けてしまうことができるので、受験までを目途として補習校もそこでやめるという選択がある。この頃にはもう親が圧力をかけて日本語を続けさせることは不可能に近くなる。ここからは、協力者の中で唯一、子どもが高等部へ進んだ CB の語りを中心に考察する。

ロンドンの補習校の歴史を紐解くと、まず、1960 年代-70 年代に子どもを伴って赴任した駐在員家族で日本語や他の教科の教育のニーズが高まり、1976 年に全日制日本人学校が発足した。補習校はそれに併設する形で開校されたのであった。その後補習校そのもののニーズが高まり、現在はアクトン、ブレント、クロイドンの 3 校舎合せて 1300 名の子どもが学んでいる。しかし 1990 年代以降は、駐在員家族数が減少し続け、今は国際結婚家庭や永住日本人家庭がなければ成り立たなくなっている。それにもかかわらず、授業内容は日本の教育指導要領に則り、日本で学ぶ子どもたちと同様の内容を教えなければならないという矛盾があり、生徒の大半を占める永住家庭の子どものニーズに応えられているとはいえない。

CB は、子どもたちが幼少のころから日本語の教育に力を入れ、並々ならぬ努力を払って補習校を続けさせてきた。上の娘が高等部に進学したのは本人の意思ではあったが、母親としてこれまで以上の支えが必要になったことを実感していた。

補習校の授業は、基本的に日本の教育と同じスピードで進み、国際結婚家庭や永住組のように現地校に通う子どもたちにとってはついていくのが難しい。漢字の習得という大きなハードルも越えなければならない。CB の子どもも努力はしているものの、授業で期待されるレベルに達するのは至難の業であった。高等部では教科書を読んで理解すること自体が難しくなり、CB 自身が教科書を読んで翻訳し、意味を理解させて送り出したと述懐している。

CB: ...その、大義名分というか、(中略) それがあつての補習校。だからこそ、文科省からも補助が出るし先生も送られてくるんですけど。それを、そのねえ、私たちのようなレベルの低いのに合わすと、別物になっちゃう。

CB: ...でもぜんぜん授業にはついていけないのはあるので、例えば、高校一年の国語、難しいのは想像しただけでわかるじゃないですか。それを私がもう全部、例えば前回なんか「羅生門」を読む、「羅生門」...{笑い}。いちおう私が日本語で読み、センテンスごとに英語にしてやり、

IR: 英語にしてやり...そこまでなさるの？

CB0184: しないと、学校に行っても話がぜんぜんわからないでしょう。だから、とりあえずだいたいの話、筋だけわかっていたら、授業に行ったとき、先生が日本語で話されたことがわかるから

IR: わかるからね。



CB0185: わかるので、何か読めなくても聞いていることがわかれば…で、先生が「それで、ここでこの男はどう思った？」とか聞いたときに、やっぱり「男はこんな気持ちだと思います」ってことをちゃんと日本語でいえるので。

高等部へ進みたいという娘の意思を尊重したCBだが、授業にはかなり苦戦を強いられていた。それでも、娘が前向きである限りサポートしたいというのがCBの本音であった。実は、CBは娘の高等部への進学をほぼあきらめかけていた時期があった。というのも、中等部でさえ娘は日本語についていくことに困難を感じており、さらに日本にも興味をなくし始めていたからである。

CBは2人の子どもが幼少のころから、関西にある実家への里帰りを熱心に繰り返していた。学齢期になると、帰国するごとに小学校に体験入学をさせ、日本人の友人を作ったり年齢相当の日常生活を送ったりできるように取り組んでいた。ところが、地域での体験入学の制度が中学校からはなかった。日本に帰国すると、下の娘が学校で楽しく過ごしている傍ら、上の娘には学校も同年代の遊び友達もいない状態となり、前回の帰国では退屈な休暇を過ごしたという記憶を残してしまった。そのため、次に夏休みの帰国話を持ち出した当初、上の娘は積極的ではなかった。

CB: もうはじめは、「ちょっと3週間長過ぎない？」って。「3週間なんて…」というんですよ。こっちの友達を置いていくから。夏休みに、せっかく遊ぼうと思ったのに…(中略)っていうのがあって、すごく躊躇というか、あんまり気乗りがしてなかったんですけど…

ところが、いったん日本に行ってみると様相がまったく変わってしまった。ロンドンの補習校で知り合いになっていた日本人の友達が偶然大阪に帰っており、梅田で待ち合わせたり遊んだりして楽しい休暇を過ごすことができたのだ。それまでのように母親がお膳立てをしてやらなくても、自分で友達と遊ぶことができるようになった。これに味をしめ、東京に観光に行ったときも渋谷で友達と会ったり自分でアレンジをして自分の行動ができたりするようになっていった。このような体験から、母親に次はいつ帰るかを聞くほど積極的になっていったのである。母親はこの展開に驚くと同時に、長い葛藤と努力の積み重ねがようやく実ったとしみじみと振り返っている。

CB: 今11年生がこれから始まって、来年は学校がGCSEとか終わるので、終わった後、夏休みがすごく長いので、「行ってもいい？」とかいい出したので…

CB: わりと途中でもバイリンガル教育とかっていうのを、私も諦めてた時とかもあったんで、諦めたっていうかもう仕方ないなと思った時があったんですけど…今すごく花開いたというか、お姉ちゃんに関してなんですけど。うーん、ちょっと血と汗と涙の{笑い}結晶が、あの、花開いた感じが今回してるんですけど。

CBが語る長女の成長物語は、それまでの苦労を吹き飛ばしてくれる喜びに満ちたものであった。しかし、話はここでハッピーエンドに終わったわけではなかった。2年後の2015年の夏にコンタクトをすると、事態はまた大きく転換していた。長女はインタビュー1年後の6th form入学時点で、補習校

をやめる決断をしていた。それに合わせて次女も中学部の途中でやめ、CBの補習校をめぐる長い闘いの日々は終わりを告げていたのだ。

しかし、ここで子どもたちの日本語、日本文化とのかかわりや学習が終わったわけではない。CBはその後、子どもたちの日本との接点を広げる活動を展開していた。2015年夏には、長女はCBが若いころ働いていた関西の英語学校で教育補助員として働いていた。次女は、CBの学校時代の友人宅を何軒か回ってホームステイの体験を積んでいた。日本語の教育という補習校での学びのサポートにはピリオドを打ったものの、子どもが何らかの形で日本との接点を持ち、日本経験を積んでいくサポートを続けている。子どもたちの自主的なイニシアティブの発動が始まることを願って、CBは種をまき続けているのである。

## 8. まとめ

本研究は、ロンドンとその近郊に住む国際結婚家庭の10名の母親に対するインタビュー調査をもとに、子どもが日本語を学習・保持していくことをめぐる困難点や問題点を考えた。

ロンドンは、ヨーロッパの中でも日本人の人口が最も多い都市である。日本人の子弟のための学校として日本人学校のほか3つの補習校がある。補習校は、駐在員など外国に一時的に滞在して日本に帰国する家庭の子どもを対象に設立され、現在でも日本の学習指導要領に準拠した教科書を使い教えている。しかし、設立当初のもくろみとは異なり、現在は補習校に通う子どもたちの多くが、永住家族や国際結婚家庭の子弟である。補習校の授業が、イギリスに住み続ける、英語中心の生活を送っている子どもたちのニーズに適っているものであるとはいえない。インタビューには、子どもの幼児期にネットワーキングや集まりを通して育まれていた日本語が、学齢期に入って勉強の対象となり、補習校の学年が高くなるとともに続けることが難しくなっていく実情が切々と語られている。このような中、母親たちは、日本とイギリスの教育制度の節目ごとに、子どもの日本語教育について悩み、それぞれの選択をしてきている。

子どもの日本語の継承・保持には、様々な要因が関わっており、それがどのように作用するかは個人個人によって異なる。家庭生活とのコンフリクトがあるか、現地校の授業や週末のアクティビティ、習い事などがどのくらいぶつかりにどのような優先順位をつけるか、仕事や家庭の中での日本語の使用状況や、日本への帰国の可能性があるかなど、それぞれ事情が異なる。このような背景から、補習校で日本語の勉強をさせるか否かや、高学年まで続けさせるか否かなどは、あくまでも選択の問題であり、選択の良し悪しが問われるものではないことを強調しておきたい。

ただ、日本とイギリスの教育制度の間で悩み、子どもに日本や日本語を自らの一部として保持して欲しいと願う国際結婚の親たちにとって、現状はあまりにも選択の幅が限られているのではないだろうか。21世紀の日本で、「グローバル人材」の育成が急務であることが叫ばれ続けている。海外に住み、日本を理解し日本語ができる人材は、大きな人的資源である。異なる文化の中を生きる国際結婚家庭の子弟は、異文化を理解し、2言語以上の言語を駆使できる人材としてのポテンシャルが高い。このような人材のための教育として、日本の学習指導要領に則った教育しか提供できていない現状は残念である。海外で生きる子どもの現状に適した日本語教育の充実が、将来的には多様な有能な「グローバル人材」を輩出する可能性を指摘しておきたい。

## 参考文献

- 三宅和子(2014a)「イギリスにおける永住型日系ディアスポラの言語生活—国際結婚した日本人女性と日本人コミュニティの形成—」『文学論藻』第88号 pp.45-63. 東洋大学
- 三宅和子(2014b)「海外における日本語・日本文化の継承はアイデンティティとどう関わるか—国際結婚女性の過去と現在—」『社会言語科学会第34回大会発表論文集』pp.170-173. 社会言語科学会
- 三宅和子(2015)「イギリスにおける日本人の国際結婚女性の言語生活—その社会的背景と子育て世代の日本語の保持・継承」『東洋通信』第52巻第2号 pp.82-94 東洋大学
- 三宅和子・岩崎典子・川上郁雄(2015)「複言語使用者は日本語・日本をどのようにとらえ、どのように向き合っているか」『第18回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集』pp.59-76. ヨーロッパ日本語教師会
- 三宅和子・岩崎典子・川上郁雄(in press)「複数言語環境に生きる人々の「日本語使用、日本語学習」の意味とアイデンティティ」『第19回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集』ヨーロッパ日本語教師会
- 外務省領事局政策課(2012)「海外在留邦人数調査統計 平成24年版」  
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/12/pdfs/WebPrint.pdf> (2013.10.1)
- 外務省領事局政策課(2014)「海外在留邦人数調査統計 平成26年版」  
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/14/pdfs/WebPrint.pdf> (2015.08.04)
- 公団法人海外子女教育振興財団 <http://www.joes.or.jp/> (2015.03.28)
- Miyake, Kazuko(2015)What made Japanese Female Expatriates Retain and Recreate their Sense of Japanese Identity?: Proceedings of the Conference The Sociolinguistics of Globalization, The University of Hong Kong, 3-6 June 2015.  
<http://www.sociolinguistics-globalization-hk2015.com/>